いにあがるのも憚られているうちに永遠のお別れをしなければならないことになってしまった。

先生の御遺志をついで日本医史学会のいっそうの隆盛・発展のために微力を尽くすことをお誓い申しあげてお別れの言葉とする。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所）

緒方富雄先生の格言

川島恂二

昭和三十八年四月私は蘭研初陣で杉田信、成卿のヒポクラテス像画讃と古河河口家との関係を発表してから、緒方富雄先生と話させていただける身となれた。昭和三十九年八月には、河口信任宅に杉田玄白の弟子河口信順が、師よりいただいた「医事不如自然」（縦書、横書二点）と他三点の幅とマクリがあることがわかった。緒方富雄先生、小川鼎三先生も医事不レ如二自然一の格言をすごく喜んで下さった。

その頃、石原明先生が私に「緒方先生だけは絶対に色紙も何もいっさい書かぬ主義だが、この医事不如自然がすごく御満悦だから、この機に川島さん、色紙に書いてくれるように頼みなさいよ。そして二枚書いて一枚は是非石原明に上げてくれと頼むんだよ、あんた」と肩を叩いた。

それで私はさっそく実行したところ、簡単に「そうだ。まさに僕はあの格言は気に入っているんだ。君には近々書いて上げよう。家に取りに来たまえ」と簡単に引受けて下さった。しかし百日たっても音沙汰なし。

それで蘭研・医史学例会の折におそるおそる御伺いしたところ「僕はそんな約束をしたのかな。いや僕は書かない主義なんだ」と額に皺。学生の口頭試験ならどこの教授でもこの表情を示したら、ビーコンに決まっている。でも私はもう落とされないから、一番褌を締め直して「緒方先生は約束して下さったのです」「いつだ」「これこれの席で」「そうか。君はそんなところでちょこっと頼んだのか、君はずるい奴だな。えーっ」と呆れ顔。「石原君の分も書け？ あいつは昔から書け書けとうるさいんだが僕は書かんよ。君の分一枚だけだ」と、しぶしぶ笑って下さった。次の例会で家まで取りに来いとのことで、はじめて先生宅を御訪ねしたところ「僕はもう書かんから以後頼むべからずだぜ、川島君」と宣告を受けた。

それから数年して京都の杉立義一先生と色紙の話から、緒方先生は書かぬ主義で困る人だとの例に挙がり、杉立氏は「私は日本一名人の抄いた高価な紙を持参して春秋二回捧げ物を供えてお願いしてるのに、もう八年たっても、気が向いたら、と書いてもらえない。あなたは一枚書いてもらっている実績があるから、頭に置いて側面攻撃して下さいよ。頼んますよ」とのことだったので、ある例会で、小川先生と緒方先生が何やら気持よく声を出して「あはははは」と笑って歓談をされて御機嫌でいたから、好機到来とその間に顔を突っこんで「実は杉立先生がそろそろ一〇年になるので、何とか書いていただけないかと悲しんでいるにつき、友情見るに忍びず御願いします」と蛮勇を奮ってお頼みするや途端、いまで笑っていた緒方先生の顔の恐ろしいこと。ああもう万事窮すビーコンだ。子供なら泣くところの下げた頭の上に「僕は、あんな日本一の紙なんか持ってくるから書かないんだ。君、失敗したらどうする積りだ」「駄目だ。僕は書かんよ」と宣告されたあの恐ろしさ。ついに口頭試験落第。（この件はちょうど一〇年目の文化の日の頃、一件落着して、杉立先生万万歳でした）

それから数年、私は河口家の玄白五点を緒方医学化学研究所に移管の労をとった。緒方先生はすこぶる御機嫌となり、次は鷹見泉石の嘉永二年作『和蘭國全圖』の複刊の相談を受け、大塚工芸社複刻、野間科学医学研究資料館から複刊発売

ができた。昭和五十五年のことで、この年緒方先生は、はじめて体調を崩して東大に入院された。

退院後御機嫌の折「杉田成卿（せいけい）画讃の河口家ヒポクラテス像の幅のように、私が色紙に画を描いて上の空白部に、我家のふたりの豚児医学生の為に、先生の書をいただいて、少し心を入れ換えて勉強をさせたいのですが」と恐々謹言お願いをしたところ、「書けばお宅の息子さんは勉強をするのかね」（どうせしやしないのはわかっているのに親馬鹿で）「します。きっと感激して少しづつ感憤興起してくると思います」「そうか、じゃあ折を見て持ってきたまえ。何か書いて上げよう」と申された。嬉しい哉。杉立先生のように一〇年待たされないことを神に祈って持参したところ、間もなく書いて下さった。

この時の画讃は「洪庵の精神を汲んで僕流の格言に作りましたが、どうですか」と渡して下さった。

「道のため　人のため　われもまた」

とあって、説明もいただいた。

そして、二、三年して北村西望氏百歳の作「ヒポクラテス」額装を出され、この時は、印刷された色紙貼布の発売で

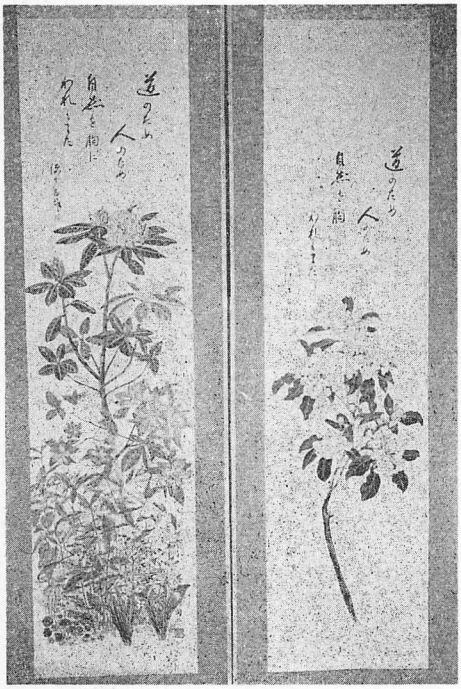
「道のため　人のため　医祖を仰いで　われもまた」

と、医祖の一句がつけ加わっていた。

先生はまた入院され、退院をされた。退院後お訪ねした折「私は一度も大家に印を彫ってもらったことがないが、日本一位の篆刻家に『緒方富雄』の印を彫ってもらいたいんだ」と申され、たまたま私の町に日展無審査で西川寧の一番弟子の生井子華先生がおられますと御推挙申し上げた。ついに念願を果され喜ばれた。

私は「先生、印も出来たので、そろそろ書かぬ主義を、後進の者を励ますために書いて残された方が、緒方先生の格言中の『人のため』になりますよ」と申し上げた。

次回の訪問の折には、「川島君にいの一番謹呈します」と自ら墨書して一行「学兄　川島恂二君　緒方富雄」の入った医事不如自然と染抜きの和紙特注財布を下さった。「こうして先生署名入りでこの財布をいただけると、皆有難く大喜びしますよ」と申し上げたところ、「では次回そうして喜んでくれる人の名と住所を二十人位書いて来てもよい」と申されたので実行し、この人達は喜んで先生に御礼状を差し上げたので、先生は書かぬ主義をついに変えた。



今度は少しは書いてもよい、と申されるので、私はいの一番に画仙紙半折に春の庭の花を写生し、伴共の発憤剤にそれぞれ一幅を残し、上に緒方先生の書をいただきたいと、謹んでお願いをしたところ一ヵ月ほどで書いて下さった。

この度の画讃は

「道のため　人のため　自然を胸に　われもまた」

であった。

先生は私に渡して下さる時に「今度は君の花の

自然の姿の写生にヒントを得て、杉田玄白先生の医事は自然に如かずの、自然が頭に閃いたので、そうだ、僕は洪庵の格言と、玄白の格言の二つを組合わせて『医祖を仰いで』ではなくて『自然を胸に』とした。これぞ我が緒方富雄の格言です」「僕はもうこれから一生これで押し通すつもりです。で、あんたは、僕の格言をもらう第一号ですよ。大事にして下さい」と嬉しさを顔一杯に籠めてお渡し下さった。

緒方先生は、この昭和五十九年以後、入院―退院を繰り返され、昭和六十三年暮にはあの豊かな体は半分に痩せられた。

奥様、御家族の厚い看護の下に平成元年三月三十一日御自宅で往生なされた。

いまは心から緒方富雄先生の御冥福を御祈り申し上げます。

（茨城県古河市）

西川滇八教授を憶う

三浦豊彦

本年四月末、青森で弘前大学医学部の臼谷三郎教授を会長として第六二回日本産業衛生学会が開かれた。今年はちょうど学会の創立六〇周年にあたり、学会長が「温故知新」を学会の思想とするということで、私が「わが国の産業医学の発展過程とその近未来像」という題で特別講演を依頼されていた。ところが学会の席で西川滇八教授の急逝のことを知らされて、元気な様子だったのにと驚いてしまった。そこで日本産業衛生学会の「労働衛生史研究会」の会員でもあった西川